

## 『大聖堂』

ケン・フォレット著、矢野浩三郎訳／新潮社

この本は1991年末に新潮文庫から全3冊で出版された大作である。出版直後に購入したが読むのを数ヶ月控えた。というのは、翌年春からロンドンで1年弱、生活することになっており、この本の舞台の地で読みたいと思ったからである。1週間以上は掛かると思っていたが、わずか3日で一気に読了し、帰国後、周囲の本好きに誰彼と無く推薦した思い出がある。著者は『針の眼』などのスパイ小説、戦争小説で有名なイギリスの作家であるが、この作品は一転し大河歴史小説である。

舞台は12世紀のイングランド。プロローグの前に、世界史上では有名ならしいヘンリー1世の跡継ぎ争いを引き起こした1120年のホワイト・シップの遭難の挿話がある。プロローグは1123年のある死刑場面で始まり、1174年にヘンリー2世が大司教トマス・ベケット殺害への関与を懺悔するまでの50年以上にも亘る。話の中心は、親子二代の建築職人が大聖堂建設を様々な妨害にあいながらも苦難の末に成し遂げるというものであるが、大聖堂再建を夢見る二代の建築職人に加えて、権力争いに翻弄されながらも神を信じ修道院の興隆に邁進する修道院長、伯爵領再興を目指す自立した美しい女性、などが絡み合う大河ロマンである。綿密な時代考証と大聖堂に関する重厚な取材を基に、史実を枠組にフィクションを巧みに織り込み、登場人物を縦横に躍動させる。冒頭の挿話とプロローグの謎が判明するのは最後の数十頁になってからである。

この本を推薦するのは、大河小説として極めて優れているだけでなく、建築様式がロマネスクからゴシックに変わる時代を扱っていて、ゴシック様式とその時代背景を知るのに最も優れた本の一つであるためだ。ネット上でも小説としての評価が非常に高い上に、建築に興味のある人への紹介としても取り上げられている。尖頭アーチ、フライング・バットレス、リブヴォールトといった様式、パリのノートルダム、シャルトル、ケルン、カンタベリー、ミラノなどの大聖堂に興味がある人は、ぜひ読んでほしい。もちろん、いわゆる大河小説が好きなのも。

後で知ったことだが、欧米では「101Books to Read Before You Die」の27位、BBCの「The Big Read-Top 100」の33位にも選ばれている。残念ながら新潮文庫は品切れであるが、ソフトバンク文庫から2005年に出版されている。

---

副読本として読むならば：

『図説大聖堂物語』 佐藤達生・木俣元一著 河出書房新社 2000年  
日本の建築に関わる小説を読みたいならば：

『五重塔』 幸田露伴著 岩波文庫（ネット上の青空文庫にも）1994年

## 執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画・地区計画）。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『大聖堂』上・中・下巻 ケン・フォレット著（矢野浩三郎）ソフトバンク文庫 2005年 2,865円

『図説大聖堂物語』佐藤達生、木俣元一著 河出書房新社 2000年 1,890円

『五重塔』幸田露伴著 岩波文庫 1994年 420円

[ブックガイド目次へ](#)